１９９０年

# 望月洋史　個展

## ぎゃらりぃセンターポイント

望月洋史

蟹殻をとらえてみると、そこは岩ということがないであろうか。
その時岩肌は深として、その生暖かさは自身を淵の内に包み込ませる。
風は乱舞をくりかえしているようではあるが、耳に囁く木霊なのか、眼前のビブラート。
四季折々の陽光は枯葉に埋もれた水中を確かに射っているのだ。
屍は生を囁き始め、美は屍を包含する。
私自身の固有のひととき。魚達の所作。